

15

中国伝統医学と道教(第37回)「道教と禪」

吉元 昭治

吉元医院

禪と道教とは、一見何等関係がないように思われるが、実は極めて近いものがあり、その結びつきも古い。まず禪は、古代インドのヨーガから初まる。今では街中ヨーガの字をよく見かけるが、ヨーガは宗教に近いもので、精神を統一し、あらゆる欲望をたち瞑想をつづけ、解脱(悟り)をはかり、一方では身体的鍛錬を重んじた。前五世紀頃、釈迦牟尼が仏教(小乗仏教)をおこし、紀元前後には改革(大乘仏教)があり、自他から利他に、出家中心から人々に拡がり、第28祖達磨が出て中国に渡り禪宗を伝え、少林寺をおこす(梁、武帝502~549年に謁す)。これより以前、中国では諸子百家の老荘思想があり、老子の希言(23章)・恬淡(31章)・知足之足常足(58章)、莊子の心斉(人間世)・坐忘(大宗師)・恬淡無為(胠篋)・吹呬呼吸・吐故納新(刻意)・恬淡之安(盜跖)などが、禪宗の思想と似ている処から受け入れられ、その後慧能が大成する。禪とは静座(道教の養生法の一つにもある)して無念無想、心を集中して安住安楽の境地になる。つまり座禅するのである。一方、道家の後継者である道教では、まず正一教が、漢末の五斗米道・太平道の農民革命からおこり、盟主張陵の流れの天師道から、寇謙之の新天師道で道教のかたちになる。さらに魏華存を始祖とする上清派、陶弘景で大成される茅山派、そこから分枝する天台派等があり、これら一連の系列は正一教として現在も主に中国南方、他の華僑社会で信奉されている。もう一つの主流に王重陽が金元時代に創めた全真教がある。この流派は儀礼・作法・儀式を禪の様式からとり入れる。演者の道教の恩師、吉岡義豊先生は戦時中、単身全真教総本山である北京白雲觀に留学修行僧として生活され、それを『道教の実態』(1941年)に記された。これを見ると一日の日課、修行法、起居食事など全く禪宗に近い事が分る。夜になると灯火もなく、冬も暖房もない苛酷な修行であった。禪宗はその後、七派に分れるが、そのうちでも臨済宗・曹洞宗が大きい。臨済宗は義玄がその居住した院名から臨済宗という。その後、黄龍・揚枝派に分れる。宋代になると、日本より榮西・辨円等が渡るが、明代に入ると衰退し、臨済宗の一派である黄檗宗隠元が逆に来朝し京都宇治に万福寺を開く。曹洞宗は第6祖、慧能が曹溪にあって法を説き、その6世良价洞山が弘めたのでこの名がある。さらに宋代に榮西の法嗣から教えもうけている道元が入宋し日本曹洞宗を開く。明代になると隠元が入朝して黄檗宗を開く。このうち臨済宗は、沢庵(豊臣・徳川初期)、白隠(江戸中期)とつづく。榮西が招来した臨済宗は分派した黄龍派で建仁寺を建て、もう一つの分派、揚枝派は円爾が東福寺を建て次第に盛んとなり、鎌倉時代には五山十刹という修行中心寺院がそれぞれ鎌倉・京都に生れるが、次第に衰え、白隠が中興の祖として出て再びもり上ってくる。白隠は禪の修行の激しさから禪病になり、京都白河に白幽を訪ねて、内観の法を授けられ健康となる。彼の著『遠羅手筈』『夜船閑話』等に詳しい。その内観とは全く道教の調息・行気であり、ここでも道教と禪の結びつきがある。また天台宗智顛は『摩訶止観』を講述(灌頂が筆述)しているが、この止観も禪の内観、さらには道教の調息に近い。また平安期に入唐している最澄は天台宗(台密)を、空海は真言宗(東密)を開くが、天台宗は禪・台・戒の融合を説く(天台宗と天台派がある事も注意する)。また榮西は禪と共に茶を招来し、日本独自の茶道をうむ。このように禪が日本の宗教・文化に及ぼした影響は大きく、禪は道教の修行儀礼をとり入れ発展してきた。岡倉天心の『茶の本』(1906)には「道教と禪」という一章がある。なお以上の一連の流れ、始祖等の年代記、分析、その他については総会で発表する。